



Title	<翻訳> The Dream of the Rood : 古英詩試訳
Author(s)	Cynewulf; 金山, 崇
Citation	大阪外大英米研究. 1979, 11, p. 147-156
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99040">https://hdl.handle.net/11094/99040</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# The Dream of the Rood

## — 古英詩試訳

金 山 崇

The Dream of the Rood「十字架の夢」なる名をつけられて知られるOE詩は、1822年にイタリアの北部、Vercelliで発見された十世紀後半辺りの写本とされるものに収められている。Cynewulfの作品と考えられているもののひとつで、従って8-9世紀の作と見るのが定説である。この詩は、その原文に極めてよく一致するものが、ScotlandはDumfriesshireのいわゆるRuthwell Crossにルーン文字で刻まれていることや、BrusselsのBrussels Crossにも内容的に類似した文句があることで、知られるが、何よりも、その作品の質の高さと独創性によって著名である。Oxfordの故C.L.Wrenn教授は‘one of the greatest religious poems in English Literature’ (C.L.Wrenn: A Study of Old English Literature, P. 134)と述べているが、OEの宗教詩には珍しい素朴で無駄のない力強さがあり、迫真性には胸を打つものがある。またいわゆるprosopopoeia「擬人法」を手法とし、dream-visionの枠で話が進行する、あるいはOEのRiddlesとの関係も指摘できる、前半77行までと後半78-156行迄の出来栄の差とauthorshipの関連、など色々興味ある問題も出されている。

どういつ訳か、知る限りでは、この詩の翻訳は、ごく一部分については散見されても全訳がない。つたないことを承知の上で、この機会に試みてみた。底本には、最も新しい刊本であるマンチェスター大学のSwanton博士のものを採ることとし、Dickins & Rossの版も同程度に参照しつつ、その他利用し得る文献には目を通した。また近代英語訳も多数あり、得る所もあったことを記して感謝したい。原文の解釈については、定説のないものもあり、比較考慮して妥

当と思われるものを選ばせてもらった積もりである。

ああ、いとめでたき夢の物語せん、1  
物言う人らふしどにつきて夜更け、  
わが夢中に見えしことどもを。

わが目に見ゆと覚えしは、まこと世の常ならざる樹の姿、  
空高く聳え、光輝あたりよりこれを包む。5  
光<sup>かく</sup>赫これにまさる樹なし。そのみしるし、  
黄金一面にふりかかりて余すなし。宝玉  
美わしく、大地四方位より光り出で、五つの玉  
また横に渡せし木が表に置かれあり。そこにもの皆、  
永遠に美わしき神が御使<sup>み</sup>の姿をのぞむ。まことに10  
よこしまなる首懸けらる架なし。聖き靈ら、  
世の人ら、また世の美わしき万物らもそを眺む。

世に珍しきはこの勝利の樹、罪に汚れ、  
不浄の深手負いたるはわれなり。宋光の樹、  
布飾りまとい、黄金に身は包まれ、15  
歎びに燦と輝く姿をわれは見ぬ。宝王、  
莊麗に主の樹を覆いいたり。されどわれ、  
樹の右脇より血潮出て初むるに及び、  
その黄金が下に浅ましき者らが古の抗いを認めけり。  
悲しみにわが心乱れ果てぬ。20

その美わしき様にわが心怖れぬ。定めなる  
このみしるし、装い、光彩<sup>いろ</sup>を変え、ある時は  
血の流れに浸りて濡ると思えば、あるは  
宝玉に飾らるを見ぬ。かくてわれ、臥せ  
たるまま久しく、心悲しく救い主が樹25  
見守るに、やがてその語るを耳にしぬ。

世にいとすぐれたる樹はかく語り出でぬ。

「そは遠き昔のこと、未だ思い出づるは  
根より絶たれ、森の縁<sup>ゑん</sup>より伐り出されし

わが身のこと。屈強の仇共、われを運び去り、

30

人目に晒さんと手を加え、己れらが罪人<sup>つみ</sup>ら掲げよと下知す。

人らわれを肩に運びて丘の上へとおろし

数多の人寄りてこの身を据えぬ。ときにわれ、人の世の主の

われに上らんと志し、心はやりて急ぐ姿見つ。

ときに地の表、いかに打ち震うを見ても、

35

われ恐ろしく、神のみ言葉に逆いて身を身を曲ぐも折るもなさず。

仇共悉く打ち倒すこと

われに能うも、立つことやめず。

この若き勇者（これ全能の神にして）、

志<sup>こころ</sup>堅く決然、まとえるものを脱ぎ棄つ。人ら皆眺むるうちに

40

ひるまず、世の人解き救わんとの心もて、高架に登りぬ。

勇者われを胸に抱き締め、わが身震けり。されど大地に身を屈め

地の表に身を倒すこと恐ろしさになわす。しかと立たざるを得ず。

架となりてわが身は立てられぬ。われ大いなる王<sup>きみ</sup>、

天が主を差し上げぬ。身を屈すること恐ろし。

45

彼らこの身を怖ろしき釘にて打ち貫きぬ。口開くる恨みのその傷痕、

未だこの身に残れり。われ恐れて、仇の一人だに傷つけず。

彼ら、われらふたりを嘲<sup>\*</sup>りぬ。かの勇者の魂消えしのち、

その脇より注ぎ出づ血潮にわが身悉く浸りぬ。

この身かの丘にて、数多の苦を

50

忍びたり。万軍の主のその身

荒々しく引き伸ばさるを見ぬ。暗蔭

雲を呼び、主の亡骸

燦たる光、を蔽いぬ。暗蔭拡がり出で、

天が下暗し。物皆涙し、

<sup>きみ</sup>王が死を嘆きぬ。キリストは架につき給えり。

55

さても、心急く人ら、\*\*そこなる主が許へと  
遠き国より馳せ来たりぬ。この身その

一切を見つ。深き悲しみに心苦しむもわれ、

彼らが手に届かんものと恭々しく心籠め、

身を屈む。全能の神の身をととりて彼ら、

60

そをむごき責苦より降ろしぬ。その武者ら、

この身、血に染み立てるままに捨て置きぬ。

わが身悉く矢に深手負う。倦み疲れし

神が身横たえ、<sup>こうべ</sup>頭の辺りに立ちて彼ら、

そこに天の主が姿見守りたり。

主<sup>いくさ</sup>激しき戦に倦みて、しばしそこに安らい

給う。彼ら武者、やがて主あやめし者を\*\*\*

65

前に墓築きぬ。輝く石刻み、うちに勝利の主

を収めたり。夕まぐれ、悲しき者ら哀歌

唱えぬ。倦みて、宋光の主よりやがて

去らんことを希いぬ。主ひとりそこに滞り給う。

されどわれら、武者らが声あがりしのちも

70

久しく、立ちつくして涙しぬ。<sup>ひくろ</sup>骸は冷えぬ、

美わしき生命の館は。人やがてわれらが身\*\*\*

悉く地に倒しぬ。怖ろしき目に会いしものかな。

人われら深き穴に葬りぬ。されど

主に仕うる近侍ら、友ら

75

聞き及び……

てこの身を黄金、白銀もて飾り給いぬ。

さて、わが<sup>いと</sup>愛しき<sup>ひと</sup>勇者よ、汝聞くこと

あらん、悪しき者らが所業、いたき悲しみ

が所業にわれ耐えしことを。時は来ぬ、80  
 世の人ら、また世の輝かしき万物らなべて  
 この身を広く天下に敬い、このみしるしを  
 崇める時ぞ今。神の御子、この身に登らせ  
 給い、しばし受苦させ給う。故にわれ、今  
 栄光に輝きて天が下に聳え立ち、われを85  
 畏れ敬う者あらば、なべてその病むところを  
 癒す力授かりぬ。かつてこの身、世にも  
 厳しき責苦の具となり、人らの極めて憎む  
 ところとなりしも、のちに正しき生命の道、人らに開きぬ。  
 ああかの丘の上なる樹より栄光の君、90  
 天が支配者、この身に誉れ授け給いぬ。  
 これ彼、全能の神、諸人がため、世の女性<sup>おみな</sup>  
 すべてにまして、己が母マリアその女を<sup>ひと</sup>  
 敬い給いしことにげに似たり。  
 さて、わが愛しき勇者よ、汝に命ず、95  
 この様<sup>さま</sup>、世の人に伝えんことを、  
 言葉もて、これ栄光の木なり、  
 全能の神、数多の人が罪故に、また  
 アダムが昔の所業故、これに  
 登りて受苦させ給えるなりと。100  
 主、その上にて死味わい給いしも、  
 大いなる力もて世の人救わんと甦り給いぬ。  
 それより神、天に昇らせ給う。審判の日  
 来たるや大神、あらためておん自らこの中が世を  
 訪い、全能の神、その天使ら率いて世の人を105  
 求めん。ここに於て神、その裁きの力もて、

世の人ひとり余さず、この仮の世にて

己れのさきに行いしところを、

応分の裁きなし給う御志ならん。

かの時、いかな者なれど、主の御言葉

110

怖れざる人はなからん。神、数多の人を

前にして、問い給わん、さきにわれ、

かの樹に登りてせし如く、主の御名のもと、

苦き死を味わわん心の者、いずこに在りやと。

斯くなりて彼ら、怖れ、神にむかいて

115

いかに答うべきや、思慮に苦しまん。

されどこの時、いとすぐれたるこのみしるし、

すでにその胸に抱きし人は、

皆恐るるの要なし。主と共にあらんこと

願う魂いずれも、かの架によりてこそ、

120

この地遠く去りて御国を求むべし。」と。

終りてわれ、ただひとり、辺りに人

無きに胸躍らせ、熱き心もて架に折りぬ。

出て発たんとわが心ははやりぬ。数うれば、

焦がるる思いに幾度も、われ耐えぬ。

125

生命の希望、われに今授かりぬ、

諸人にまさりてわれ、ひとり勝利の樹

求むること多く、また崇むることの多からんと。

わが胸に、その樹慕う心強く、

かの架こそわが身の護りと頼む。

130

われこの世に、力ある友多くを

持たず。彼らはこの現世の喜び捨てて

去り、栄光の王求め、今

天国に父なる神と住居し、

栄光に包まれて在り。しかしてわれ、

135

日々待ち望むは、この現世にて先に見し  
 十字架の、この仮りの世よりわれを連れ  
 去り、しかして至福存するところ、  
 天国が喜び、――そこに主の民ら  
 宴の席につけられ、久遠の至福存す ― 140  
 へと導き給い、しかしてそれより後もわれ、  
 栄光に包まれて住居し、聖者らと  
 豊かな喜び分かち合うことの適わん処へと  
 この身置かせ給う日の到来なり。  
 ここ現世にありて昔、人の犯せし罪故に、 145  
 架にかかりて受苦されし主よ、わが友となれんことを。  
 主御身は、われらの贖罪なし、われらに  
 生命、天の里、与え給いぬ。かしこにて  
 火に焼かれし者らに、希望は甦りて、栄光と天福に充つ。  
 神の御子、その旅路に勝利収め給いぬ、 150  
 力強くして事成し終え給う。彼、全能の支配者、  
 衆徒率い、万軍の霊と共に、神の御国へ  
 帰らるるや、天使ら、また先に栄光に  
 包まれて天に住居せし聖徒ら、共に  
 あまねく喜びたり、彼らが支配者、全能の神 155  
 その里なる御国へ着き給いしときに。

(1978. 10. 10 )



\*ふたり…キリストと語り手である樹のこと。

\*\* キリストの弟子であるヨセフとニコデマスのこと。

\*\*\* 十字架となったこの樹のこと。

\*\*\*\* キリストのほかに刑に処せられた者たちの処刑の木を含めている。

\*\*\*\*\* 地獄のこと。

\*\*\*\*\* いわゆる the Harrowing of Hell のことであろう。キリストは地獄に降りて行ってそこに堕ちている魂を救ったという。

底 本

M. Swanton, ed.: *The Dream of the Rood*, Manchester University Press, 1970.  
その他のテキスト

W.F. Bolton: *An Old English Anthology*, Edward Arnold, 1965.

F.G. Cassidy & R.N. Ringler: *Bright's Old English Grammar and Reader*,  
Holt, Rinehart & Winston, Inc., 1971.

R.E. Diamond: *Old English Grammar and Reader*, Wayne State University  
Press, 1970.

B. Dickins & A.S.C. Ross: *The Dream of the Rood*, Methuen, 1967.

R. Fowler: *Old English Verse and Prose*, Routledge & Kegan Paul, 1973.

G.P. Krapp: *The Vercelli Book*, Columbia University Press, 1961.

M. Lehnert: *Poetry and Prose of the Anglo-Saxons*, Max Niemeyer, 1960.

F. Mossé: *Manuel de l'anglais du Moyen Age*, Aubier Montagne, 1960.

J.C. Pope: *Seven Old English Poems*, Bobbs Merrill Company, Inc., 1966.

R. Quirk, V. Adams & D. Davy: *Old English Literature*, Edward Arnold,  
1975.

S. Suzuki: *Old English Religious Poetry*, Kenkyusha, 1972.

Sweet's *Anglo-Saxon Reader* revised by C.T. Onions, Oxford, 1954.

Sweet's *Anglo-Saxon Reader* revised by D. Whitelock, Oxford, 1967.

A.J. Wyatt: *An Anglo-Saxon Reader*, Cambridge, 1948.

翻 訳

M. Alexander: *The Earliest English Poems*, Penguin Books Ltd., 1969.

K. Crossley-Holland & B. Mitchell: *The Battle of Maldon and Other Old  
English Poems*, Macmillan, 1967.

R.E. Diamond: *Old English Grammar and Reader*, Wayne State University  
Press, 1970.

R.K. Gordon: *Anglo-Saxon Poetry*, J.M. Dent & Sons Ltd., 1964.

M.W. Grose & D. McKenna: *Old English Literature*, Evans Bros Ltd., 1973.

- R. Hamer: A Choice of Anglo-Saxon Verse, Faber & Faber, 1970.
- C.W. Kennedy: The Poems of Cynewulf, Peter Smith, 1949.
- C.W. Kennedy: Early English Christian Poetry, Oxford, 1968.
- M. Lehnert: Poetry and Prose of the Anglo-Saxon, Max Niemeyer, 1960.
- The Norton Anthology of English Literature, Vol. 1, W.W. Norton & Company, Inc., 1974.
- The Oxford Anthology of English Literature, Vol. I, Oxford, 1973.
- J.D. Spaeth: Old English Poetry, Gordian Press, 1967.
- S. Suzuki: Old English Religious Poetry, Kenkyusha, 1967.
- 文学史など
- G.K. Anderson: Literature of the Anglo-Saxons, Princeton University Press, 1966.
- W.F. Bolton, ed.: History of Literature in the English Language, Vol. I The Middle Ages, Sphere Books, 1970.
- D.G. Calder & M.J.B. Allen: Sources and Analogues of Old English Poetry, D.S. Brewer, 1976.
- S.B. Greenfield: A Critical History of Old English Literature, New York University Press, 1972.
- K. Malone & A.C. Baugh: Literary History of England Vol. I. The Middle Ages, Routledge & Kegan Paul, 1967.
- D. Pearsall: Old English and Middle English Poetry, Routledge & Kegan Paul, 1977.
- K. Sisam: Studies in the History of Old English Literature, Oxford, 1967.
- C.L. Wrenn: A Study of Old English Literature, G.G. Harrap & Co., 1970.
- 厨川文夫：中世の英文学と英語，研究社，1957。
- 松浪 有：中世英文学（講座英米文学史 詩Ⅰのうち），大修館，1977。